| ２０．Feb.　２００７（火） | LUANG　PRABANG<br>（LUANG　PHABANG） |
|---|---|

９：００　　breakfast コーヒー、パン、バターで朝食。ゲストハウスの玄関の軒下に店が出ている。
近隣の住民もここで朝食を採ることがあるのか、２－３人が朝食を採っていた。

１０：００　　ゲストハウスを出て、ルアンプラバンの街が一望できる仏塔へ登ることとする。
国立博物館（かつての王宮）の真正面にある小高い丘。Phousi 呼ばれる仏塔。
仏塔への階段近くにある Laha の店にて織物製品を物色。藍染の綿のシャツを購入。
旧王宮（国立博物館）に入館するつもりであるが、昼食時間にかかるため、一旦、宿に帰り、残り少なくなったカメラ用メモリーカードを交換し、昨日の絵葉書に文章を入れ、郵便局へ持ち込み投函することとする。
郵便局で切手を選びハガキを投函。約１週間で届くとのことであったが、帰国後、５日後に届くこととなる。
明日のメコン河の船遊びを予約し、王宮見学に行くも、休館日。毎週火曜日は清掃のため、休館するとのこと。仕方無く、予定変更してワットシェーントーンに行く。

１７：４５　　ゲストハウスに帰着
夕食に出る。レストラン Blue Lagoon　で夕食
豚肉の生姜焼き、蒸しライス、スパゲッテイ、ビアラオ、コーヒー、マンゴージュース。
１４万キップ。外国人経営らしく、よく整ったレストラン。
夜のマーケットを見ながら、お土産を物色して、徒歩にて宿に帰る。

朝のメコン。右の巨木が印象に残る。

早くから客待ちするツクツク。この周辺にはゲストハウスが多い。

宿を出て、徒歩にて街中へ。その途中、裏町では朝市が立つ。この時間でもかなりの賑わい。しばらくして店じまいに入る。市民が食材を調達する市のようだ。食生活は豊かであることがわかる。米はラオス米。陸稲は粘り気が適度に有って、日本のコメの食感によく似ている。
魚はメコンの淡水魚。どこに行ってもテラピアがある。これは外来魚ではないのかな。養殖されているのか？一時期、日本でも、鯛に似ていることから、〇〇鯛との名称ではびこっていた。

少量が単品で出されている。近くの農家が売っているのだろう。
上中央は芋。生をかじると、何とも味の無いものであった。
下の左は日本でも秋に山で自生しているキノコ。旨い。
左の塀は王宮ではなかったかと思う。こうして朝市が立つ。

王宮（博物館）裏口

立て看板に見入る老人。こんな建物が
立ちますよと言う宣伝。左はその工事中。政治スローガンではない。この国で政治スローガンは見なかった。

この街でも建築ブーム。
この建物は木造

街中、到る所にワットが見られる。それぞれ趣が異なり。興味深い。これはワットマイ（Wat Mai）。
この写真には無いが、５重に重なった本堂の屋根は優美で美しい、夜のマーケット越しに見える姿は印象的。本堂の壁のレリーフは仏教の輪廻を表していると言われる。

←訪問歓迎。ラオスの写本（経典）の保存に感謝。写本（経典）保存センターと英文が…

Laha の店先。日本人も協力している活動らしい。
高品質な自然織物。布、クッション、帽子、スカーフ、キルト、部屋の服飾品、バッグ。綿の藍染シャツを購入、これ以来、着用してラオスを歩くことになる。

【プーシー(Phousi)】

案内書によると、３２８段の階段を昇って頂上へ。２人の仙人が神様に導かれてこの山にたどり着き、ルアンプラバンの街を造ったと言う伝説の山。展望台としてツーリストに人気のあるあるスポット。夜のマーケットからもライトアップされた仏塔が見える。

堂の中。猫が・・・

頂上からの展望。中央に王宮（博物館）その先はメコンの流れ。ワットマイの優美な屋根が見える。茶色の僧衣は高僧、黄色は修行僧、白は尼僧とのこと。

バスターミナル方向を望む。川はナムカーン。蛇行しながら、この町で、メコンに合流する。
右は空港方向を望む。左上方に滑走路が見える。

Post Office　外国語表記はフランス語。

ラオス開発銀行。ここで両替

←公園は常設のマーケット、夜も昼も

街中の簡易ポスト。切手も売っている。　→

街を歩く僧の姿。この町は標高６００mのところ。朝夕は涼しいが、真昼の太陽は強い。日よけが欲しい。むしろ、ツーリストは日除け無しで歩く。我慢強い。早朝、５時起きすれば、街の全域で托鉢する僧の姿が見られるとのこと。僧に敬意を表する宗教儀式が半ば、観光化されたと言われ、ゲストハウスにも見学する者の心得が書かれている。この行事に敬意を払うことが第一。

街なかを歩くと、ガイドブックにも載らないワットがある。住職（そんな僧の制度があるのか知らないが）の気持ちが感じられるような、美しくしつらえられたワットを見た。本堂の日蔭で読書して、時間を過ごす外個人ツーリストの姿も印象的。数葉の写真を示す。　↓

←廃棄物処理は大きく立ち遅れているが、一方では廃タイヤを加工した丸いゴミ箱が街に・・・

↑昨夜のレストラン、工芸品ショップの真昼の姿

サッカリン通り裏のワット。こうしたところは自由に出入りして見学できる。

↑サッカリン通りに面した伝統ある小学校の風景。保護者がバイク、ツクツク、車で迎えに来ている

サッカリン通りのワット。ワットが集中した地域で、自由に出入りできる。

この地区にはツーリスト相手にする店も多い。近くの村の民具、織物、和紙など。右の和紙を売る店で気の利いたものが売られており、照明器具に最適。購入することに。近くのメコン河畔の村に和紙をすく集落あり。明日のメコン河の舟のツアーのコースになっている。

【ワットシェントーン（Wat Xiengthong）】
1560 セーターテイラート王によって建立された寺院。ラオスの寺院の中で最高の美しさを示すものと言われている。本堂はルアンプラバン様式と言われる設計になっている。特徴は優雅に、しかも大胆に湾曲した屋根にある。ビエンチャンの寺院より、屋根の傾斜は緩く、幾重にも重なるゼザインが特徴とされる。

↑寝仏が収められた小さな祠。正面の仏道の裏。

↑規模は大きなものではな→いが、その特徴はよく理解できる。美しい姿である。
控え目で繊細な感情がよく表れていると感じる。我々にも違和感のない優美なものとして受け入れられる　。手前は小さな祠の壁面↑

←本殿背面の壁に施されたモザイク。「黄金の木」。かつてこの場所に立っていたと言われる高さ１６０mの大樹がモチーフになっていると言う。仏教にまつわる物語が描かれていると言う。質の高い、品格に溢れたものに感じられ

↓小さな祠の背面にも同種のモザイク

↓小さな祠の入口装飾

１９６０年に行われたシーサワンオン王の葬儀で使われた霊柩車が収められている建物。黄金の龍をモチーフにした霊柩車は葬儀の盛大さを彷彿とさせるものである。

１９６０年と言えば、つい、近年のことである。フランスの植民地支配が終焉を告げ、インドシナ戦争からベトナム戦争の内戦の困難な時代背景である。

１９世紀なかばにフランスはラオスを植民地支配したが、ルアンプラバン王国だけは王国の体制を存続させた。勿論、王には統治上の権限は与えなかったが。

終戦直前の僅かの期間、日本軍が支配し、ルアンプラバン王国を独立させる。この独立は第二次大戦の敗戦とともに失効する。フランスは再び植民地化を開始。臨時人民政府を追放し、ルアンプラバン王国を擁立してラオス王国を成立させ、実効支配した。内戦状態が続く中で１９５３年フランスーラオス友好条約を締結しラオス王国を完全独立させ、ラオス王国が国際承認されたが、ラオス自由戦線の抵抗は続いた。１９５４年ジュネーブ条約が締結されたが、履行されず、二つの政府の存在が続いた。ようやく１９５７年成立した第一次連合政府も崩壊、内戦へ。１９６２年、第二次連合政府が成立するも、１０か月で崩壊。１９６４年にはアメリカ軍による解放区への爆撃開始である。ベトナムへの北爆即、ラオスへの介入である。このような時代背景の中での王の葬儀を重ね合わせて考えるとき、感慨深いものがある。当時の左派、パテト・ラオの流れを汲む現政権がこのルアンプラバンや宗教をどう扱おうとしたのかとも合わせ考えると、興味はつきない。今なお、ルアンプラバン近辺の山中に生き残るモン兵士の掃討作戦が展開されることもあるとの事実を知るにおよんで、世界遺産都市として欧米人ツーリストで賑わう観光地としての現在を重ねあわせる時。・・・・

ラオスが永遠に平和であることを！

↑王の棺を飾る黄金の龍

←棺を飾る天蓋

←境内には巨木がよく似合う→

←ワットシェーントーンのサッカリン通りの反対側の出口を出て階段を降りると、そこはメコンの流れ。
少し上流でナムカーン川と合流する。
→

ツクツクで宿に帰ると、メコンに夕陽が落ちる頃

夜のマーケットの通りと交差する細い通路は食べ物の屋台。
匂いで充満。インド風カレーが旨いとか。ツーリストの姿も多数。

今宵はレストラン「ブルーラグーン」（Blue Lagoon）で夕食。
スイスのレストランに長年勤めていたシェフが開いた店とか。マネージャーも外国人。
ヤシの庭に適度な照明。野外で心地よい席。料理の質、施設の質も優れた西欧風。その代り、料金も高い。１４万キップ。起業者は何らかの関係で外個人。

食事を終えて、再び夜のマーケットへ。ルアンプパバーン最後の夜。少し買い物をして徒歩にて宿へ。

←夜のマーケットの灯りの向こうに、プーシーのライトアップが、この上を間じかに、航空機が舞い降りる。
ゲストハウス通りは、統一した手作りの照明。 →